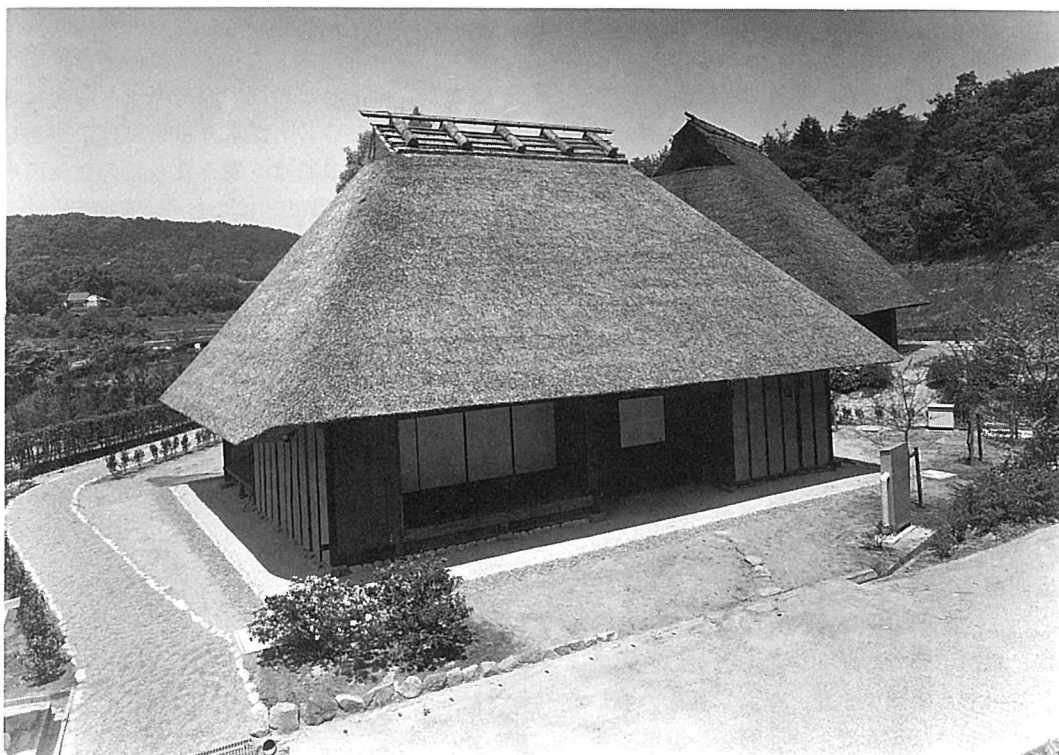


民俗博物館だより

Vol. X VIII No. 1
1992. 7. 31



▲旧八重川家復元正面

目 次

大和民俗公園（宇陀・東山集落）	
旧八重川家住宅一般公開	1
民俗資料聞き書き短信 17	
茅葺屋根とその伝承(2)	3
吉野郡下市の町場の性格(2)	6
お知らせ	7

大和民俗公園（宇陀・東山集落）

旧八重川家住宅一般公開 平成4年7月21日

当住宅は山辺郡都祁村大字針に所在していた。代々農業を営んだ家であると伝える。建築年代を直接示す資料を欠くが、建物の形式手法上からみて19世紀前半頃の建築と思われる。

移築前の間取りは正面向かって左半が居室、右半は土間であった。居室は三室で表側に半間の縁が付き、表「ざしき」8畳は床、押入をしつらえ、裏の二室は土間側に、「なかま」8畳室、「なんど」3畳、押入付きで妻側へ半間張り出していた。土間は表の右隅に「はたべや」4畳半、この妻側に風呂、便所を設け、はたべや裏側は釜屋で、その裏側は流し台、妻側に戸棚が付き、居室境は表より上り縁、「ひろしき」を付設し奥に戸棚を設けていた。

軸組は上屋柱は頂部を京呂組とし差鴨居・貫・足固め等、下屋柱とは垂木、貫、足固め材で軸組を組み固め、上屋梁は長さ3間強、表側桁より突き出して小天井を造りせが風とする。土間の梁は縦横に架構するところ等は、東部山間の特色を示していた。小屋組は合掌組で、屋根は茅葺、正面を葺きおろして棟飾り部分は切妻形、棧瓦葺の小屋根で覆う。

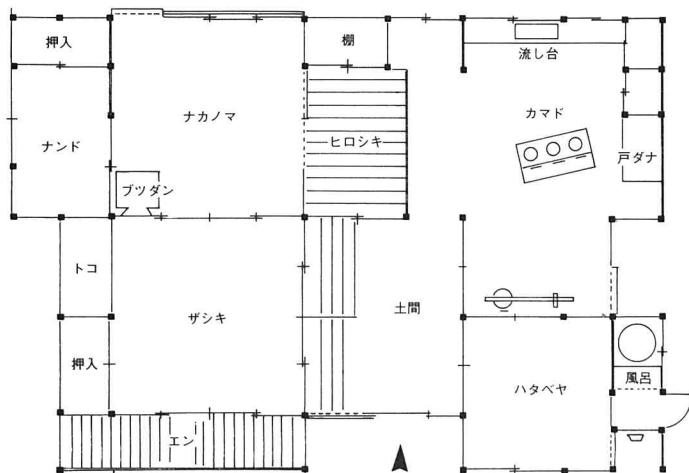
天井は上屋梁上は一連の簀の子天井、居室

部はさらに棹縁天井を張り、釜屋上部は天井を凸型に開きこの見上げ面を土で塗り固めた煙突状になっていた。

さて建物の復元は部材痕跡等によって建築当初の間取り、外観に復した。外観は棟飾り部分の棧瓦葺小屋をカラストビ形式の棟飾りとなり、両側及び背面の庇を撤去し四面葺きおろし形式となる。間取りは居室は二室となり「なかま」8畳は6畳となりこの表側に半間の縁が付く、また「はたべや」を撤去し「まや」となる。土間の背面及び妻側の側柱通りは基は半間内側に移り、側柱通りとなる。土間及び居室境の上り縁を撤去し土間を現した。さらに「ひろしき」は裏側で半畳大の広さと



▲移築前正面



移築前平面図

なる。

この住宅は県内の住宅史を知るうえで標準的間取りを示し、さらに軸部・架構法もこの地方の特色を示す等資料価値は高い。

註1. 居室^{きしつ}=日常いる部屋で、居住、執務、作業、集会、娯楽等の目的のため継続的に使用する室

註2. 半間^{はんげん}=約90センチメートル

註3. 縁^{えん}=各地の民家において室の外部に面した側に設けられた細長い板敷きの部分を指す呼称。

註4. 妻側^{つまがわ}=切妻屋根、入母屋屋根の両端の三角形になった壁面の側、寄棟や陸屋根の場合にも用いられ、平面の短辺の側を呼ぶ。単に「妻」ともいう。

註5. 釜屋^{かまや}=民家において土間の奥に設けられた炊事場を指す呼称

註6. ひろしき^{ひろしき}=民家において土間に張り出した幅の広い板床を指す呼称。

註7. 軸組^{じくぐみ}=土台、柱、梁、桁、筋かい、などから構成されている壁体の骨組。

註8. 上屋柱^{じょうやばしら}=合掌や小屋梁を支えている柱。

註9. 下屋柱^{げやばしら}=下屋にかける梁や桁を支える柱。

註10. 小天井^{こてんじょう}=軸部分の天井、木造建築では垂木や野地板（裏板）を化粧として軒裏を現す場合と天井を別に張る場合がある。

※ 化粧=建築においては、見え掛りの部分または材をいう。

註11. 京呂組^{きょうろぐみ}=各地の民家工事において小屋

梁の端部を納める技法の一種を指す。側柱の上に桁を載せて、これに小屋梁をかける工法。

註12. せが^{せが}い風^{ふう}=茅葺き屋根で軒の出を深くする方法。

註13. カラストビ形式^{カラストビ形式}=主として草屋根の棟飾りの総称。

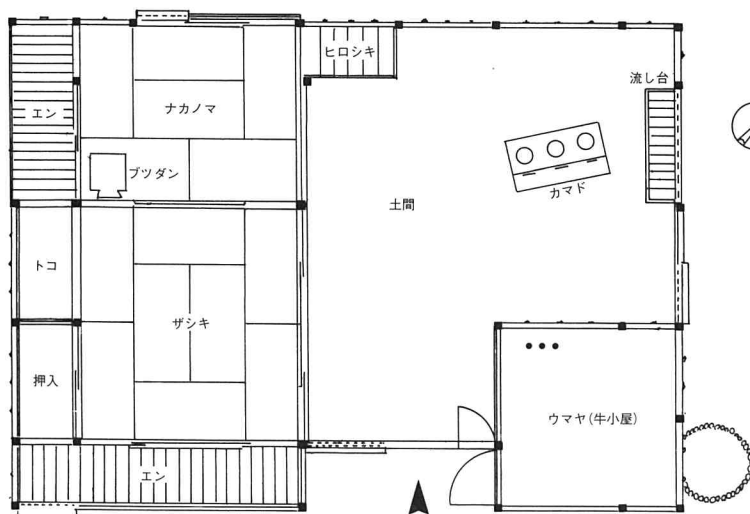
註14. 簀の子天井^{すのこてんじょう}=各地の民家において竹を並べて編み、その上にむしろを敷いて土を載せた天井。屋根裏の防火上の工夫であったという。



▲妻側からみた煙り出し



▲土間(釜屋の部分)



復元平面図

茅葺屋根とその伝承(2) ——茅葺の工程——

横山 浩子

今回は、旧八重川家住宅（以下、旧八重川家と略す）の復原工事の実際をもとに、茅葺の手順を追ってみよう。茅葺作業とその呼び方、また屋根を構成するところの各部名称等は地域により違いもみられる。ここでは、できるだけ隅田隆蔵氏からお聞きした用語によりたいと思う。

* * *

1. 足場を組む

カヤモチ（軒の先端に取付けられる太い竹、あるいは木）の取付け位置から歩み板までの高さが作業者のほぼ膝下くらいの間隔になるよう見当をつけ、調整して組む。

2. 合掌、タツビソとヒザツキ、また棟木とタツビソの交点を荒縄で結束する

タツビソとは垂木のこと。カケビソともよぶ。ヒザツキは一般に母屋（母屋桁）とよばれている。括り方には、二ノ字掛と襷掛の二種あり、旧八重川家は前者による。合掌とヒザツキの交点は2本縄で3回縄をまわし男巻1回してツノ結び。タツビソとヒザツキは2本縄で2回巻き付け。

3. カゴ竹を編みつける

軒先にカヤモチを括りつける。ヨコ竹を20cm位の間隔で編みつけてゆく。タツ竹（縄取り竹）をタツビソの間々に入れてヨコ竹との交点を数ヶ所結束する。なお、軒部分は「霧がはうので」棕櫚縄で、それより上部は荒縄

を用いる。こうして茅が落ちこまないように屋根の下地を準備することを「屋根カゴをつくる」という。

4. 編み茅をつける

足元の長い茅を選んで軸部だけになるよう雑物を掃除（茅スグリ）したものを2掴み分位づつ束ねて、軒先（カヤモチからの出、約4寸プラス鉄の切り代）に軸部が揃うように敷並べて編みつけてゆく。化粧茅ともいう。

5. ダイツケ

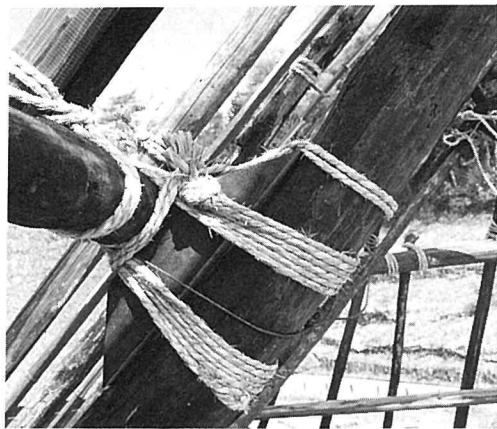
屋根の厚みをきめるため、四隅に茅の束を積んで括り付ける。

6. タバセをつける

カブが太め、スエに向かってすぼまりぎみの形になるよう茅を選び（丈は短め）半分分くらいに束ね直したもの（タバセ）を4の上に一段のせ、棕櫚縄でカゴ竹に結いつける。タバセは、葺き始めの茅の取付く角度を調整して滑らかに葺き上っていけるようにするため、また軒にかかる荷重を支えるために重要な役割を果たしている。ツヅミ、という括り方で屋根カゴにしっかり取付ける。

7. 屋根の厚みをつける

茅を束ねる縄をはずして、下腹から膝の部分を使って抱えるようにして株を揃えながら（カラスジを通すという）6の上に敷並べてゆく。ひと並べを「一枚」といい、二枚、三枚と重ねて必要な厚みをつける。茅の上に押



▲合掌とヒザツキ、ヒザツキとタツビソの結束部



▲屋根カゴをつくる

さえ竹（かつてはヌイギとよんでいた）を置き、これと屋根カゴを縄で結んで、茅を挟みつけてとめていく。

8. 厚みがいたら葺き上っていく

仕方はほぼ7と同様である。ふつう葺き茅を三枚並べて押さえ竹でおさえる。これを「ヒトハリ」とよぶ。またこの茅とは別に、茅のスエが落ち込まないようにノジ（屋根勾配）の加減をみながら間に随時ホリコミ（捨て茅）を入れてゆく。手前のほうに入れるのをマエジキ、上の方に入れるのをドウジキという。ヒトハリ上る毎にコテで木口を整え、足場丸太を屋根カゴに括り付けて上ってゆく。

オの部分は、茅を適当な束にまとめたものをカゴに括りつけ、さらにこれを両側から抱くようにして、二つの束をつける。これをオのツケとよぶ。この形のを一段積むのを「一のツケ」、上にもうひと重ねするのを「二のツケ」という。ふつう、中葺のところヒトハリ、オの部分に二のツケを積んで一段葺き上ったかたちとなる。

9. テッキを積む

8を繰り返して棟のところまで葺き上ったら、茅のスエを内側に折り込む。その上に棟木と平行方向に茅の束を載せ、荒縄でしばりつけながら三角形に積み上げてゆく。妻側の三角形の木口（テッキ）部分として現われる両端の茅束の外縁部分には、編み茅（すぐり茅）を入れ、この部分が形くずれなく、すっきり仕上がるようにする。

10. 棟のかたちをつくる

旧八重川家では品軒（シコロ）に形作られている。棟の両端に杉皮各一枚宛置いた後、



▲編み茅の上にタバセをつける

化粧茅（すぐり茅）を縦向きに二枚敷並べ、ここで一段、段をつけるような形に整え、トコ竹で押さえる。このような形の棟をシコロとよぶが、一般には総葺（ゴロ葺）するときにはできるだけ早く仕上げる方がよいので、このように段はつけず、そのまま葺き上ってしまうことが多かった。むしろ、棟部分の修理（約12～13年毎）をしたとき、新旧の茅が不自然な感じになるのを緩和するでてとしてよく行なわれた。

11. 棟包み①

杉皮を、トコ竹に差し込むようにして全体にかぶせていく。二枚重ねにして、表に出る方は、鬼皮をこそげとったものを使う。これは日にさらされるうちに、表面がはねて見苦しくなるのを防ぐためである。両端は、10の茅を包むように巻き込んで、竹のオリを刺してとめる。

12. 棟包み②

棟の天辺に竹杭をVの字に立てて、ジムネ竹を置く。杭を立てたところに荒縄を掛け、ジムネ竹とトコ竹の間にサラシ竹二本ずつを配して、この縄で綴る。

13. 棟包み③

表裏で向かい合っているサラシ竹、トコ竹どうしをハリを使って棕櫚縄で結束し、互いに強く締めつける。この後、ジムネ竹を支えていた杭は、中に打ち込んでしまう。

14. 棟包み④ カラストビを置く

旧八重川家は、解体前は棧瓦葺の箱棟を載せていたが、カラストビの形式に復原された。12、13で縄を結束したそれぞれの位置に茅束を被せるように置いて杉皮二重で包み、銅線



▲テッキを積んでシコロを形づくる

で千鳥掛けに括って仕上げる。

15. 棟包み⑤

杉皮（カラストビも含めて）の端の始末。
またジムネ竹以外の竹の端をそろえて切り落とす。テッキの木口を切り揃え、端に竹でつくったハオサエを置いて、杉皮で包まれた化粧茅の下に潜らせるように竹の杭を打ち込み、これを押さえる。

16. スズメオドリ（カラストドリ）を載せる

屋根のてっぺんに載る竹を「スズメオドリ」とよぶ。

竹のカブ(太い方)を人の目につきやすい方に向けて据える。カラストビの部分は下を鋸と手鉾で欠き落とす。銅線でジムネ竹と結束する。スズメオドリとジムネ竹の両端を斜めに切り落として仕上げる。竹の傾斜の上端と下端の長さの差は5寸程度。あまり急な角度にすると「屋根の形が硬くなる」とのことである。

17. 刈り込み①

シコロの端口を鋏（直鋏）で刈り揃える。
テッキを仕上げる。続いて曲鋏で屋根表面を刈り込んでいく。足場を上から二本づつ外しながら下りてゆく。鋏は下から上に向かって動かす。かつては直鋏を使って斜めに刈り、曲鋏を使って仕上げていたが、この方法は刈り手の腕による出来の差が大きく、また必ず斜めに筋がつくので、昨今他地方にも広く出向くようになると、場所によってはこれを嫌うところもあって、ほとんど行なわれなくなった。

「イリカブ」といって奥に入り込んでしまった茅は、手やヤットコを使って引っ張り出

しながら刈る。刈っては竹箒で屑を払い落とし、コテを使って表面を整えていく。

18. 刈り込み②

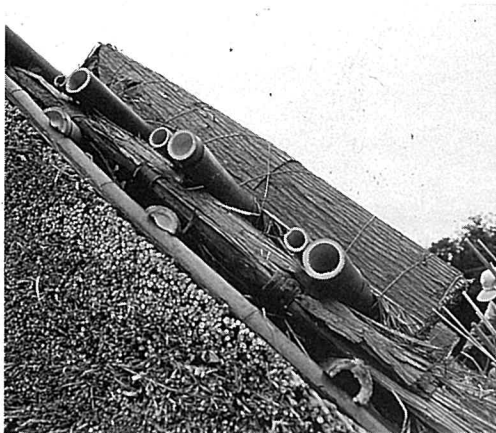
四面とも刈ったら、軒の端口を整える。瓦などの底が取り付けられているものは表から切っていく（これをアビセという）が、今回のような葺下ろしでは「ウラギリ」といって、足場の位置を下にさげて、軒の内から抑ぐようにして鋏を使う。まず、軒裏の編み茅だけを、カヤモチから4寸（屋根の厚みなどによって寸法は加減する）の出になるよう、位置を決めて切り揃え、刈込みの目安とする。続いて両端近くを少し刈込み、屋根表と軒内との角度（当地域の場合は屋根表に向かってやや斜め上がりとなる）、左右のバランスをみて、よければ、これを基準に水糸を張る。屋根表の茅を厚み3センチほど切って目印にし、改めて全体を刈り揃えていく。なお、隅の部分は、切り残しておき、これを挟む直線部分の刈り込みが出来た後、形良く整える。

軒やテッキの端口を切り揃えるのには特に、小型の直鋏（コバサミ）を用いる。

これら刈り込みの鋏は堅い茅のカブを切るため、休憩のたびに研ぎ、また作業中もたびたびネジ部分に油をさす。などのこまめな手入れを行なう必要がある。

このほか、今日ほとんど行なわれることはないが、かつて奥宇陀地方では、屋根屋の仕事として、小屋組、すなわち、合掌を組み、棟木を上げて、ヒザツキを並べ、カケピンを掛けるところから行なったという。

（以下、次回）



▲棟の端の始末



▲刈り込み

吉野郡 下市の町場の性格 (2)

浦 西 勉

では、その町場として成立した下市はどのような性格があったのであろうか。それには、再び蓮如が築き上げた信仰集団が住して発達した寺内町の性格を吟味することになる。

それは、蓮如が一時住んでいた堅田本福寺の寺院の姿から眺めてみる必要を感じる。先に堅田は商業・職人的性格の人々の信者が多かったと記した。そこでは毎月18日に講（集会）が営まれる。堅田の本福寺の存在は、とりもなおさず講を営むための場となる。

下市においても同じことが行なわれたと考える。この蓮如を中心とした信仰集団は講（集会）を営むことを常とする。蓮如の著した「御文章」文明9年のものに次のことが記されている。^{註1}「毎月ノ会合ノ由来ハナニノ用ゾナレバ、在家無智ノ身ヲモテ、イタヅラニクラシ、イタヅラニアカシテ、一期ハムナシクスギテ、ツキニ三途ニシヅマン身ガ、一月ニ一度ナリトモ、セメテ念仏修行ノ人数バカリ道場ニアツマリテ、ワガ信心ハ、ヒトノ信心ハイカバアルラントイフ信心沙汰ヲスベキ用ノ会合ナル」

と示されている。

このような講は、道場を中心として老若男女が集まって信心の沙汰を確かめあうのである。特に報恩講の時は、次のごとく記されている。^{註2}

所詮、今月報恩講七昼夜ノウチニヲヒテ、各々ニ改悔ノ心ヲヲコシテ、ワガ身ノアヤマレルトコロノ心中ヲ心底ニノコサズシテ、当寺ノ御影前ニヲヒテ廻心懺悔シテ、諸人ノ耳ニコレヲキカシムルヤウニ毎日毎夜カタルベシ。

また、「蓮如上人一代聞書」にも次のごとく記される。^{註3}

仏法談合ノトキ物ヲ申サヌハ、信ナキ故ナリ。我心ニタクミ案ジテ申スベキヤウニ思ヘリ。ヨソナルモノヲタヅネイダスヤウナリ。心ニウレシキ事ハ其儘ナルモノナリ。寒ナレバ寒、熱ナレバ熱ト、ソノマ、心ノトホリヲ

言フナリ。仏法ノ座敷ニテ物ヲ申サヌコトハ不信ノ故ナリ。

これらを見るとかなりこの場（寺・道場）にて話し合う形態（集会）が読み取れる。しかも、その話は心からの懺悔を含めるのである。

このことと町場の性格とどのような関連を見て取れるか。それにはかなり検討が必要となるであろうが、商業的精神・職人的精神とこの浄土真宗の精神が一對となるような気がする。同時にまた、このような場と人々が集まって話し合うというスタイルは、集団の自治が独立している傾向にあると思われる。それが町の発達の原動力であり、この町の性格でもあると考える。

このような場と話し合いと合わせてもう一つの要素として、この集団では掟が存在する。例えば、蓮如上人が作ったといわれる「九十ヶ条制法」がそれである。二・三の例をあげると次の通りなのである。^{註4}

一、ヤ、モスレバ世間ノ売買ヲコノミテ利潤ヲサキトセントスル条、スコブル放逸ニアラズヤ。停廢ニシタガウベキコト。

一、仏法者ト号スルヒトノ、虚言ヲカマヘ、シラヌコトヲシリタルヨシ、ヒトニカタリ、ワレヨリホカ、モノシリハアルマジキヤウニイウヒトオホシ。コレハ後生ノ大事ヲ分別セズシテ、タゞ今生ダニモ、ヨクスギタラバトオモフヒト、コレハ無間地獄ニオツベキタグヒナリ。コノヒトニハ、ツ、シンデチカヅクベカラズ遠離スベキコト肝要ナリ。

一、ヨロズ正直ニシテ、内外トモスコシモワヅライノナキヤウニシテ、仏法・世間トモニヨクマモリテ、余所ヨリスコシモソシリヲウケヌヤウニ、マタスコシモヌスミゴ、ロモツマジキコト肝要也。

一、念仏者ノ中ニ、酒アリテノメドモ、本性ヲウシナヒテ、サカグルヒスルコト。

一、念仏者ノナカニ、ヌスミ・博奕ヲスル

